

中東地域の安定のために 全ての人に支援を届けたい

情勢不安が続くパレスチナやシリアに隣接し、中東地域の安定のカギを握るヨルダン。JICAヨルダン事務所の大崎光洋さんはこの国の発展のため、難民、女性、障害者などの生計向上に取り組んでいる。

日本で 識字問題に直面

大学生の時、ボランティア活動の一環で、中国残留孤児[※]として日本に帰国された方と会う機会がありました。日本語がうまく話せず、帰国後の生活に苦勞しているようで、中国語も話せはするものの、文字は読めない。子どもころに読み書きを学ぶ機会がなかったことを聞きました。その時初めて、世界には識字教育を受けられない人がいるという事実を知ったのです。

この衝撃から教育に関心を持ち、大学院生の時には、ベトナムで識字教育支援に取り組む団体の活動を見に行ったり、国際機関のインターンに挑戦したりしました。そんな経験を通じて、自然と国際協力の仕事を志すようになり、JICAに就職したのです。

周りと協力しながら 研修をつくり上げる

最初に配属されたのは、神奈川県国際水産研修センター（現・JICA横浜）。担当したのは、漁の手法や船の造り方などの技術を学んでもらう研修でした。水産分野についての知識がほとんどなかったため、すぐさま勉強を開始。魚の加工についての書籍を読んだり、研修と一緒に取り組んでいた専門家には、家が近かったこともあり、休日にも勉強を手伝ってもらいました。

そうしているうちに研修に生かせる知識が少しずつ身に付き、どうすればより良い研修になるかアイデアが浮かぶようになります。厳しい漁にも耐え得る小型ボートの造り方、水産物の加工・販売に女性のアイデアを生かすための講義などを取り入れました。地元の漁業関係者たちの熱心な指導、研修員たちの真剣に学ぶ姿が、私の仕事の原動力でした。

小さなアイデアで 支援の効果を拡大

2010年からはヨルダン事務所勤務しています。女性や障害者などの社会参加が遅れ、またパレスチナやシリアから多くの難民を受け入れているため、国内の格差が広がっています。中東地域の安定のためにも、この国の全ての人に届く支援が必要なのです。

そこで力を入れているのが、発展が遅れている南部の農村に保健医療サービスを提供する協力です。村の隅々にまで気を配ることができるとは、私たちではなく現地の人たち。各村から代表となる女性たちを集めて、母子の健康を守るための啓発活動や家庭訪問などを行えるように研修を実施してきました。

「自分たちの村のために」と何事にも懸命に取り組む姿を見て、あることを思い付きました。彼女たちに、村の障害者の支援に



JICAヨルダン事務所
大崎光洋
OSAKI Mitsuhiro

大学院卒業後、1999年にJICAに就職。神奈川県国際水産研修センター（当時）の後、外務省経済協力局有償資金協力課と在イスラエル日本大使館に出向。資金協力業務部を経て、2010年1月から現職。

も取り組んでもらえないかと。地方では特に、学校に行けなかったり、仕事に就けなかったりと、障害者の社会参加の機会が奪われていたからです。



ヨルダンで障害者支援に取り組む女性とフィリピンに行き、現地の活動を視察する大崎さん（右端）

研修を通じて、障害者が直面する障壁や差別を学んだ彼女たちは、「障害者が学校に行けないのはおかしい」と、自分たちの村に戻って校長先生に掛け合い登校許可をもらうなど、障害者の社会参加に汗を流してくれるように。資金や人材に限られた現場でも、アイデア一つでより多くの人々に支援を届けることができると実感しました。

しかし、予期せぬことが起こることもあります。2012年、パレスチナ難民の女性たちの生計向上を支援していた日本人専門家が病気になる、志半ばで亡くなってしまったのです。この時は、一緒に事業を引っ張ってきたヨルダン政府のアデルさんと号泣しました。難民たちに、より良い生活を送ってほしい。生前、彼女が言っていた言葉を思い出し、アデルさんとはその遺志を受け継ごうと誓い合いました。

ヨルダン、そして中東地域の全ての人が平和を享受できるよう、これからも心を込めて一人一人に向き合っていきたいと思います。

「日本の支援に本当に感謝しています」。自分で作った香水を見せるパレスチナ難民の女性から話を聞くアデルさん（右から2人目）と大崎さん

※第二次世界大戦の混乱の中、中国に取り残され、現地の養父母に育てられた日本人。1972年の日中国交正常化の後、その多くが帰国した。